

野田書房、第一書房などの本の装幀の話をもさ
た。天野さんは、出版社の編集者であったこともあり、古書店を開いていたこともあった。自ずと装幀が身近にあつた。

天野さんの第一冊は、詩集『讀め歌抄』で、奥付には、一九七九年五月の発行となっている。ノア創業四年目にあたる。

天野新さんに連れられて、京都下鴨、洛北高校編集工房ノアでは天野忠さんの本を十三冊出した。詩集が八点。隨筆集が五点。生前に十点が出て、亡くなられた後、三點出版した。

天野さんは、装幀好き、であつた。細かく注文をつけるわけではない。出されたものを、そのまま受けとめながら、どんな装幀で本が出来上がるかを楽しんでいる。これはいや、こうして欲しいでなく、装幀について話し合う。その中でお互いの呼吸のようなものが生まれてゆく。御自身の本の装幀を離れても、いろいろ話をし

た。天野さんは、出版社の編集者であつたこともあり、古書店を開いていたこともあつた。自ずとも手元に、完全に整理された原稿を用意されていたので、私を見て渡すのが不安になつたのだ

う表情を露骨にされた。はつきりと、顔に出した。

装幀好き

—天野忠さんの十二冊の本

滝沢純平



帯文として、天野さんが『沙漠の椅子』で天野さんについて書いた文章の一節を使った。

西脇順三郎を迎えた南禅寺での会で、天野さんは、床几に座る二人の女性が描かれ、一人が賞杯をかけている。『讀め歌』たるゆえんか。二人のバツク、カバー平面の全体に、ギリシャ文字らしきものが色をえて、大胆にあしらわれている。

絵は、栗津謙太郎。創業当時は栗津の装幀が多く、ノアカラーとなつていた。栗津はブックデザイナーというよりは、銅版画の画家で、自身の絵を使って装幀をする。

この詩集の判型はA5判変型。天地は正寸だが、左右を10ミリカットし、細身とした。以降、天野さんの詩集は大方、このサイズにしている。なぜ最初一〇ミリカットしたのか、今では思い出せない。私は詩集の場合、内味にもよるが、このサイズが好きなのだ。

私は、こうまで不信をあらわにするものか、戸惑つた。が、詩集の仕上がりで応えるしかないと思い返した。この時、天野さん七十歳。私、三十三歳。

天野さんは、私を見て、「こいつ大丈夫か」という表情を露骨にされた。はつきりと、顔に出した。すでに手元に、完全に整理された原稿を用意されていたので、私を見て渡すのが不安になつたのだ。この書名は天野さんが名付けた。

天野さんは、私を見て、「こいつ大丈夫か」という表情を露骨にされた。はつきりと、顔に出した。すでに手元に、完全に整理された原稿を用意されていたので、私を見て渡すのが不安になつたのだ。この書名は天野さんが名付けた。

思想・文化情報の〈現在形〉を読む
創刊 1999年12月01日

La Vue ラ・ビュー

No.15 (2003/12/01号)

発行人:山本繁樹

発行所:るな工房/黒猫房/窓月書房
大阪市都島区友渕町1-6-5 408号 TEL534-0016
TEL 06-6924-5263/FAX 06-6924-5264
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html
E-mail:luna-sy@mx2.canvas.ne.jp

目次

特集 装幀談義/造本の周辺

- ◆装幀好き ——天野忠さんの十三冊の本 滝沢純平
- ◆手製本は周回遅れのトップランナー 藤井敬子
- ◆オブジェとしての装幀 吉本麻美
- ◆装丁違論 川口 正
- ◆「La Vue」の〈新創刊〉に向けて ——自己の脱構築とさらなる他者との交響を目指して
- ◆編集後記

発行所の住所が変わりました。
■無断転載を禁じます■

数量化革命

ヨーロッパ霸權をもたらした世界觀の誕生

A.クロスビー／小澤千重子訳
暦・機械時計・地図・遠近法・複式簿記・楽譜…中世・ルネサンス期における世界觀の革命的変化を活写する西欧精神史 ◆3200円

オトメの行方

近代女性の表象と闘い

川村邦光
オトメ概念を軸に、近代女性の変遷を探る。國版多巻収録 12月上旬刊行◆2200円

動物たちの自然健康法

野生の知恵に学ぶ

C.エンジエル／羽田節子訳
野生動物が知っていた自然の偉大な治癒力。チンパンジー やゾウ やシカたちの、自然の恵みを使つた健康術を初めて紹介 ◆2200円

紀伊國屋書店

出版部: 東京都渋谷区東3-13-11
TEL.03(5469)5918 表示価は税別
http://www.kinokuniya.co.jp

同和利権の真相

「同和利権の真相」が覆い隠した眞実!!

宮崎学・斎藤貴男・吳智英・森達也・角岡伸彦・中央本部他著
2002年3月、同和対策特別法の終了後、堰をきつたように解放運動バッキングが始まつた。差別をネタに利権を漁る人権マイア?爆笑もあるで!

B4判変型 ■上製本・ケース入 ■2228頁 ■12600円(税込)

A5判並製 250頁 予価1500円
+税

解放出版社

大阪市浪速区久保吉1-6-12
TEL.06-6561-5273 FAX.06-6568-7166
東京都千代田区神田神保町1-9
TEL.03-3291-7586 FAX.03-3293-1706

上村松園画集

監 上村松園 ■編 塩川京子 ■文 梅原猛 ■文 杉本苑子
B4判変型 ■上製本・ケース入 ■2228頁 ■12600円(税込)

光村推古書院
〒603-8115 京都市北区北山通堀川東入
TEL.075-493-8244 FAX.075-493-6011
http://www.mitsumura-suiko.co.jp

佐藤勝彦作品集

序文 II 立松和平
写真 II 寺島郁雄/解説 II 矢島新
B4変型・総418頁 ■星内見本

絵画から工芸まで、多岐にわたる佐藤勝彦の芸術世界を俯瞰する、作者自選の豪華版オールカラー作品集。

■28000円+税

宝庫 ■1500円+税

花亭亭九里丸編 幻の名著

つに復刊。寄席樂屋用語の名著。

■28000円+税

佐藤勝彦の芸術世界を俯瞰する、作者自選の豪華版オールカラー作品集。

■20000円+税

幻の名著

佐藤勝彦の芸術世界を俯瞰する、作者自選の豪華版オールカラー作品集。

■20000円+税

花亭亭九里丸編 幻の名著

つに復刊。寄席樂屋用語の名著。

■20000円+税

ナカニシヤ出版

ドイツ観念論研究の必須文献
ヘーゲル哲学体系への胎動

斐ヒテからヘーゲルへ
ヘーゲル哲学の超華オールカラー写真集
りながら、造像の軌跡を詳細に解説。付資料編。■20000円+税

山内廣隆著 本体4800円+税

内陸中国の変貌
改革開放下の河南省鄭州市城
内陸部に光をあたることで、中國の将来への新たな視座を提供する
石原潤編 本体3400円+税

思考・進化・文化
日本人の思考力

文化心理学・進化心理学の成果が明かす、「考える」ことの楽しさ。
山祐嗣著 本体1400円+税

なにわ大阪狛犬の謎

石造参道狛犬のルーツを探る旅。

小寺慶昭著 本体2200円+税

608-8316 京都市左京区吉田二本松町2

TEL.075-571-1211/FAX.075-751-2665

http://www.nakanishiya.co.jp/

「庭は便所の窓からみるのがよろしいな。庭が油断してますさかいに」
と結んだ…、この会話の妙、芸的な仕上げ…。

大野さんがとらえた天野さんのこの場面が、何より天野忠の詩の世界、人物のあり方を表している、と私は思った。印刷は活版印刷。

こうして『讃め歌抄』は出た。

後の隨筆集『木洩れ日拾い』には、天野さんの自筆年譜が付いて、一九七九年の項には、

五月に詩集『讃め歌抄』(編集工房ノア)刊行。株式会社編集工房ノア主人の若い潤沢純平を識り、以後同社から著書の出版が多くなった。

と記されている。この後、一九八一年に出版した『私有地』で、読売文学賞を受けるのだが、全体の統一は別にして、個々の詩は、『讃め歌抄』の方にすぐれたものがある、と私たち話した。そのことがあつたからだと思う。

私の手元に、天野さんから贈られた『ぶらんこあそび』天野忠詩集(限定壱部也)と表書きされた一冊の本がある。内の但し書きに、——天野忠詩集『讃め歌抄』抄(はり絵・しゃしん・切抜きなどいろいろあり)限定一部也。

詩は『讃め歌抄』の中から十九篇が、選ばれている。詩は一篇一篇手書きである。天野さんの線描の絵が随所に入っている。その他、雑誌や印刷物から切り抜いた東洋画。

西の名画・写真が貼つてある。絵だけの頁、写真だけの頁もある。詩と絵が見開きで組み合わせてある頁もある。天野さんは映画好きでもあったが、スタイケンが撮った「グレタ・ガルボ」の写真も、見開きを使っている。

つまり、天野さんの手書き手作りの一冊きりの詩画集なのだ。A4判のスケッチブックで作られている。奥付発行日は、一九八五年七月十三日。忠の落款も押され、奥付の上には馬の絵馬の写真が貼つてあるという凝りようである。天野さんが楽しんで作られた様子が目に浮かぶ。

改めて編集工房ノア刊行の天野さんの著作をあげると、

- 『讃め歌抄』(詩集)一九七九年五月
- 『そよかぜの中』(隨筆集)一九八〇年八月
- 『私有地』(詩集)一九八一年六月
- 『掌の上の灰』(詩集)一九八二年八月
- 『夫婦の肖像』(詩集)一九八三年九月
- 『続天野忠詩集』一九八六年六月
- 『木洩れ日拾い』(隨筆集)一九八八年七月
- 『動物園の珍しい動物』(詩集)一九八九年一月
- 『春の帽子』(隨筆集)一九九三年二月
- *
『耳たぶに吹く風』(隨筆集)一九九四年十月

『掌の上の灰』は、京都新聞に「日一度のほっこり」として連載した詩を収めた。掌の上の灰のように軽い詩、ライトヴァースと称した。漫画家の滝田ゆう氏に、「西の庶民派の詩に、東の庶民派の絵を付けてしまさい」とたのんだ。カバーの絵は、細かく線描された古い長屋とおぼしき家の前に、お下げ髪の少女が影で立っている。本文中にも、絵が何点か入っている。この本は、絵が入るために、文字は活版で組み清刷を上げ、オフセットで印刷した。

改めて編集工房ノア刊行の天野さんの著作をあげると、

『万年』は、天野さんの毛筆による書名題を受賞した。

『追加で送りますか』は、天野さんから封筒を渡された。

二人で出た授賞式の帰りの新幹線の中で、天野さんから封筒を渡された。

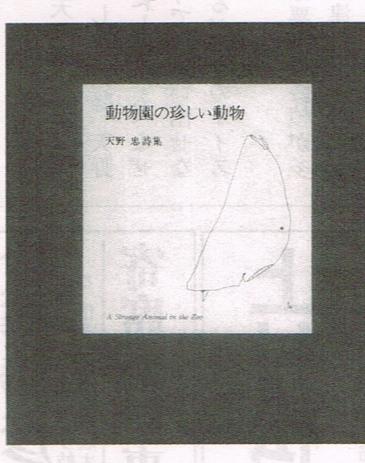
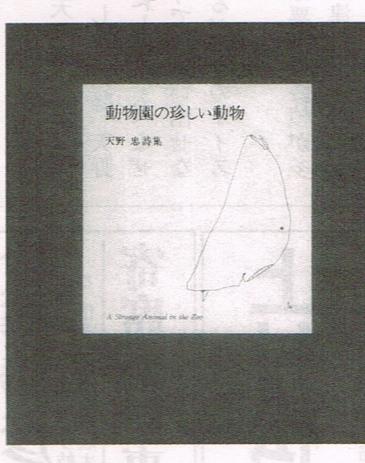
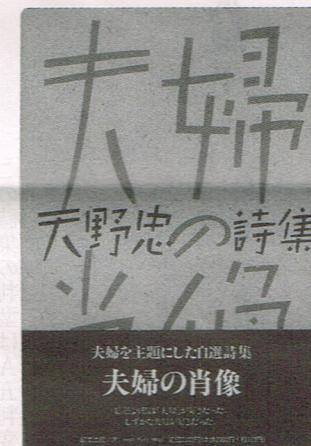
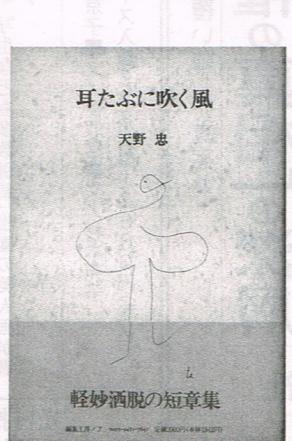
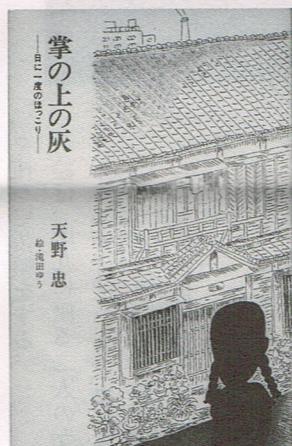
『追加で送りますか』は、天野さんの親しき出版社も表彰される。ただし出版社に賞金はない。

贈呈者の名簿である。天野さんの親しき出版社も表彰される。ただし出版社に賞金はない。

『続天野忠詩集』は、永井出版企画から出た『天野忠詩集』以後の五冊の既刊詩集を収めた。A5判正寸函装、五二〇頁。装帧は栗津謙太郎。口絵に竹中郁さんが描いた天野さんの横顔を入れた。毎日出版文化賞を受賞した。この賞は、著者と共に出てください」とたのんだ。カバーの絵は、細かく線描された古い長屋とおぼしき家の前に、お下げ髪の少女が影で立っている。本文中にも、絵が何点か入っている。この本は、絵が入るために、文字は活版で組み清刷を上げ、オフセットで印刷した。

『万年』は、天野さんの毛筆による書名題を受賞した。

『春の帽子』は、生前出版の最後の本。天野さんは大津市民病院に腰の靭帯手術のため、装填は天野さんがした。大野さんの詩集の判型は他と異なりB5判の変型で、天地を短く正方形に近くしている。函入りで、装填は天野さんがした。大野さんの解説を乗にした。



『私有地』装幀も栗津謙太郎。読売文学賞を受賞した。

『掌の上の灰』は、京都新聞に「日一度のほっこり」として連載した詩を収めた。掌の上の灰のように軽い詩、ライトヴァースと称した。漫画家の滝田ゆう氏に、「西の庶民派の詩に、東の庶民派の絵を付けてしまさい」とたのんだ。カバーの絵は、細かく線描された古い長屋とおぼしき家の前に、お下げ髪の少女が影で立っている。本文中にも、絵が何点か入っている。この本は、絵が入るために、文字は活版で組み清刷を上げ、オフセットで印刷した。

改めて編集工房ノア刊行の天野さんの著作をあげると、

『追加で送りますか』は、天野さんの親しき出版社も表彰される。ただし出版社に賞金はない。

贈呈者の名簿である。天野さんの親しき出版社も表彰される。ただし出版社に賞金はない。

天野さんの永眠は、それから五年後の

一九九三年十月二十八日。

『耳たぶに吹く風』という書名は、「好きなことばの中に耳たぶがある。」『耳たぶを吹く風のような溜息を洩らした』といふ三浦哲郎の文章の中のことばもいなかからとった。三浦哲郎氏に手紙を書いた。奥さんから、お使いください、の電話をもらつた。

『草のそよぎ』も、文章の中の「時間という草のそよぎに頬っぺたを吹かれているような老年」から取つた。『耳たぶ』の装幀は、天野さんの絵、『草のそよぎ』は、天野さん自筆の原稿用紙右の文章の箇所を使つた。大野さんが安く上げたな、と笑つるすべてを出し終えて、いささかの感慨があつた。

『うぐいすの練習』は、詩稿と共に、天野さん自身が作つた目次も残されていた。これを基本に、未発表詩をいくつか加えた。装幀は最初に還つて栗津謙太郎。生前天野さんから預かれた原稿、出版できうるすべてを出し終えて、いささかの感慨があつた。

私の出版人生で天野さんから受けたものは、あまりに大きい。後は『天野忠全詩集』出版が残されている。天野さんは全詩集が出版されることを信じている。その装幀を楽しみにしている。

■プロフィール（からさわ・じゅんべい）一九五五年、株式会社編集工房ノアを設立。現在に至る。

2003年12月20日発行予定 ■
塔和子全詩集
〔全三巻〕第一巻発行
A5判・函入・860頁
予価8000円（本体価格）

自己の存在の深みを見つめ、人間の尊厳を問う魂の詩。
詩集『はだか木』『分身』『エバの裔』『第一日の孤独』
『聖なるものは木』『いちま人形』全篇収録。

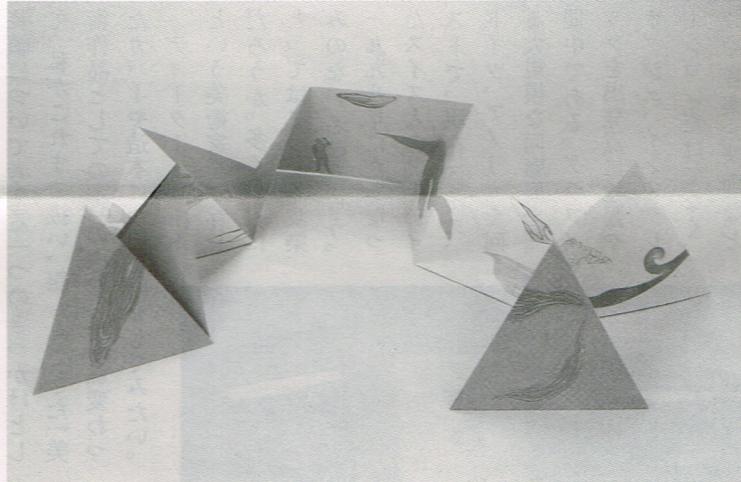
編集工房ノア

〒531-0071 大阪市北区中津3-17-5
TEL.06-6373-3641 FAX.06-6373-3642

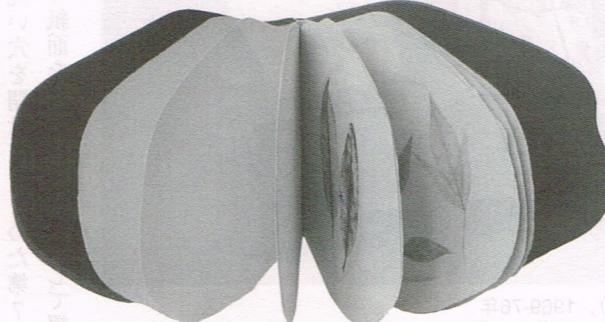
装幀談義／造本の周辺

手製本は周回遅れのトップランナー

藤井敬子



「雲のゆくえ」2002年制作 藤井敬子のカラーエッチング雁皮紙刷り
ジャバラ仕立て エッチング十手彩色手織紙 H230×230×14mm



「LEAVES」1998年制作 内容は藤井敬子によるカラーエッチング
ブラン・ラボルテ 仔牛革十綱紐 H261×284mm

私たちには和本の伝統をもつ国に生活していますが、今では日常生活の中で和綴じの本をなかなか見ることは出来ません。父は大正生まれの八十歳、謡曲をたしなんでいるので、家には少しですが和綴じの本がありました。一方、これは多くの日本人の特性かもしれません、「包む」という行為を楽しむのが好きで、贈答品だけではなく、本にまで自家製のカバーをつけたりしています。現在で言えばノートのようなものですが、祖父が大福帳を作つていたのもかすかに記憶しています。明治の作家が残した自家製の本の話にも見られるように、「本をつくる」ということは今よりずっと身近なものだったのではないかでしょうか。

私は絵描きですが、自分の絵を内容とした本をつくるためにルリユール（工芸製本）という分野の仕事をもっています。ルリユールは本をつくるためにヨーロッパで発達した技術ですが、私の場合は和本の作り方も、洋本の作り方も両方取り入れて作業をします。たとえば、銅版画を入れて壁面に掲示するのではなく、横に展開する折り本にして屏風のように展示したり、手に持つて開いてみるとができる本のかたちにすることで、平面的な絵に立体的展開するおもしろさが加わります。

紙が発明され、書写したものを綴じて本の形にしていった遙か昔の時代から、基本的に変わっていない手作業による本づくりには、古今東西の知恵を見ることがあります。

現在流通している本のかたちは、明治時代にヨーロッパから技術や機械を輸入して普及した、洋式の製紙技術と製本法

自己の存在の深みを見つめ、人間の尊厳を問う魂の詩。
詩集『はだか木』『分身』『エバの裔』『第一日の孤独』
『聖なるものは木』『いちま人形』全篇収録。

であります。和紙に書かれ刷られた和本は、そのままでは和紙で作ら

れていた本が、洋紙に大量印刷されるようになつてからは、「自ら綴じて製本する」という日本在来の習慣も私たちの世代まで伝わらず、どうやら近代化の途中で失われてしまつたようです。「こより」をつくったことはありますか？ 若い人に聞いてみると「見たこともない」と言います。和本の要は和紙でできた「こより」でもあります。糸が切れたら読者が綴じ直して

わらかな性質とともに、構造がよく見え、背を一本の糸で綴じてあるのがよくわかれます。糸が切れたら読者が綴じ直して

いたようですが、少し心得のある方でしたら誰でもできたのではないでしょか。

それに対して洋式製本による本は複雑

です。近年盛んになつてきた「ルリユール」は、海外でその技術を学んできた先輩たちが少しずつ普及させてきた成果です。

ソフトカバー・ハードカバーなどに製本され、すでに市場に流通している本を、あ

えて解体して再製本するルリユールがわ

が国では一般的ですが、最近ではその基

本である「糸綴じ」の折丁構造を残した本

さえも見つけるのが難しくなつてきてい

ます。「あじろ綴じ」が考案された三十年前からはその普及に伴つて、糸でかがられた本がさらに少なくなつてきていました。ほかの国ではどうなのかと海外の本を見るたびに糸かがりかどうか、そつと探つてみるのが癖のようになっています。が、美術書など大方の本は糸でかがつてあるようです。「あじろ綴じ」や「無線綴じ」の本を解体した場合は、膨大な時間をかけてこれらを折丁の形にしなくてはなりません。糸でかがつた本は読みやすく、開きがよく丈夫なだけでなく、その本の寿命を確実に延ばせる、いわば優良な遺伝子を持つていています。出版社のみなさま、少しでも糸かがりの本が増えることを期待しています。

また、未綴じ本や仮綴じ本を製本する

過程で、特徴的なことの一つに、仮綴じの

表紙を前後に切り離して、本文の前と本

文の最後にそれぞれ短冊状の足をつけて

折丁のひとつに組み込む「モンタージュ」

という作業があります。日本の書店で見

るハードカバー・ソフトカバーの本には、

別丁扉・化粧扉といわれる本文とは違

う用紙に刷られた扉がついています。が、こ

れは日本独特のものようです。明治時

代に洋式製本をつくるにあたつて参考に

した本が、仮綴じ本から仕立てた伝統的

なルリユールだったのではないか、とい

う仮説を導くものです。

この作業は、本にすでにほどこされた

装幀・ブックデザインを、全く破棄する

のではなく元の姿をわざかでもとどめる

役割をしています。市場にある本を再製

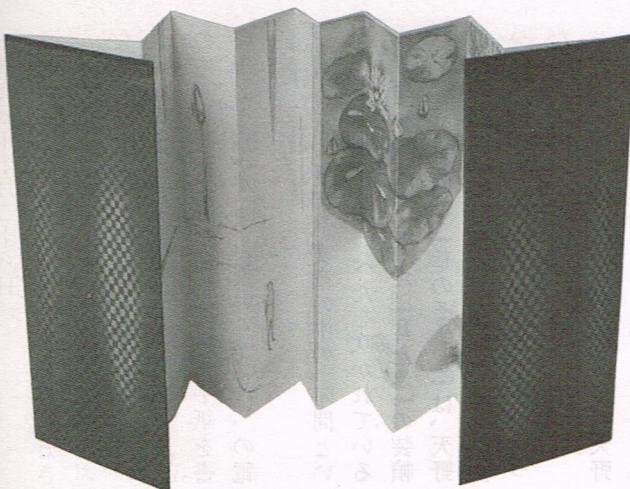
本するためには一度解体する過程を経る

ため、補修作業も必要になつてきます。こ

うした現代のルリユールは、美しいたたずまいの本を作り出す楽しみとともに、ある意味で小さな歴史の保存の役割も含んだものとして機能しているともいえます。大量につくられ、消費されるものとしてはなく、知の容れものとしての本来の役割を担い、視覚と触覚を楽しませる芸術性もあわせ持つた新たな「本」として生まれ変わることです。

時間をかけて製本する素材本を見つけるなかつたり、使いたい本が折丁になつてしまおう! という意見は、手で本をつくる人たちにとつてはむしろ自然な流れだと思います。普及が著しいコンピューターとプリンターのある環境は、まさに私家版の本をつくるためにはうつつけなのです。非常に凝ったことを望まない限り、ワープロソフトに装備された

ユーティリティとプリントの環境は、まさに私家版の本をつくるためにはうつつけなのです。非常に凝ったことを望まない限り、ワープロソフトに装備された



「水鏡」2000年制作
藤井敬子によるカラーエッティング
ジャバラ仕立て
エッティング刷り手彩色手織紙十枚
牛革 H304×132mm

面付け機能を使えば、本文折丁をつくることも比較的容易です。でも、そこで「本の形にする」という大問題がでてきます。市販されている簡易な製本キットで十分かがつて製本するには、ある程度専門的な知識と技術が必要です。各地の製本講座が人気を集めているのも、パソコンの普及とマイ出版ブームを反映したことかもしれません。

和本の代表的な製本方法である「袋綴じ」がつくれられるようになつたのは室町時代のことですが、同じ綴じ方で現代の本をつくることもあります。同様に西洋で製紙や印刷術が誕生してから伝えられてきた作り方で、現代のテキストも本に仕立てられているのです。本の誕生(いつだらう?)からの技術や仕組みの変遷に思いをはせるとき、表層のデザインだけでは見えてこない、たくさんの知恵と本の魅力が詰まっていることに気づきます。最適な材料と的確な知識さえあれば、美しく丈夫な本を、この手で生み出すことができるのです。これは素敵なことだと思いませんか? フランスでは一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて装幀美術が最盛期を迎えていました。そして今、周回遡れのトップランナーのように、手製本が見直されつつあります。近年日本のルリユールと和綴じの技術が国際的に高く評価され、注目されているのは、二一世紀の最先端技術と西洋の伝統技術とが、一〇〇年の時を経て日本というものづくりの国で出会つたことへの驚きと期待を反映した結果なのでしょう。このような現在だからこそ、創造的で美しい作品をつくつていきたいと考えています。

■ (ふじい・けいこ) 京都市立芸術大学で日本画と版画を専攻。九八年イタリア国際製本美術展「二五人の匠」選出、九九年バスケット国際製本展・受賞、〇〇年エストニア国際製本展「金の本」賞受賞、〇一年第二回イタリア国際製本美術展「二五人の匠」選出など。版画製本工房アトリエ・リヴ・ゴーシュ(東京)、アトリエ・リーヴス(京都)主宰。東京製本俱楽部発起人。

ホームページ = <http://www2.ocn.ne.jp/~reliure>

オブジェとしての装幀

装幀談義／造本の周辺

吉本麻美

装幀とは何だろうか。私が勤務する美術館では本をめぐる美術作品を収集方針の一つとしているが、装幀は実は私にとって苦手な分野である。実体が捉えにくく、とても一言では表せない。美術館では以前、本をテーマとした企画展を行つた際に、装丁、装釘、装訂など「ソウテイ」という言葉をどう表記するかが問題になつたこともあつた(結局、今回の特集と同じ表記の「装幀」に収まつた)。そこで広く装幀について考へる一つのきっかけとして、私がこれまで扱い、親しんできた「美術作品としての本」の中から、一風変わつたカバーや造本について紹介してみたい。

その中に『作品集』と題したシリーズがある。同じ判型で20年ほどの間に26点が行なわれたが、この『作品集』は過去の作品を写真図版でまとめた単なる作品集ではない。これまでに制作したアーティスト・ブックを再編集し作り変えたもので、『作品集』自体が美術表現であり、作品と呼べるものである。既存のコミックに所々丸い穴を開けてまとめた第7巻や、新聞の紙面を何百倍にも拡大して綴じた

第10巻など、それぞれに魅力あふれる一冊となつていて。各巻とも千部程度発行されたが、私がまず取り上げたいのは、この中の何巻かに存在する百部発行の特装版である。

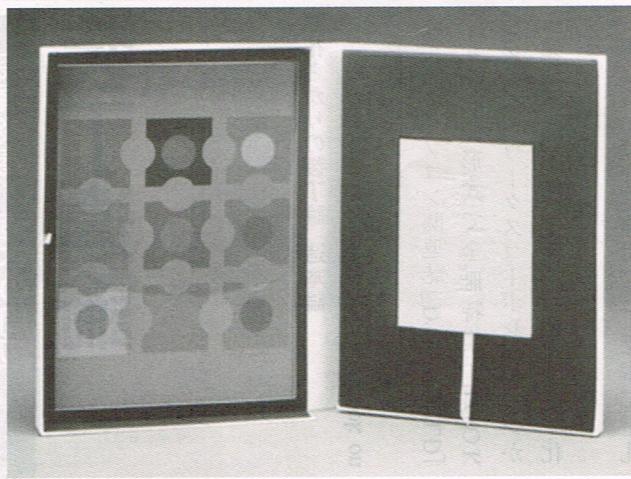
特装版とは、千部発行の冊子に各々異なるカバーをつけたものである。例えば第10巻ではボール紙のカバーに窓がくり抜かれ、新聞紙を切つて綴じた豆本が収められている。第11巻のカバーには溶けた電球が貼り付けられ、第18巻と第19巻ではゴム製のカバーにそれぞれカセットテープとフィルムリールがはめ込まれている。第20巻には紙製のカバーが9種付属しており、他にも青焼や版画、ドローリングを施したシートを折り畳んで冊子を包んだカバー等がある。

このような独創的なカバーは、全く同じ判型の『作品集』を一変させる力を持っている。見た目はただの冊子でしかなかつた『作品集』が、より作品性の強い「オブジェ」に変わるのである。もちろん冊子もモノであり物体(=オブジェ)であるが、ここでいうオブジェとは日常的常識的な意味が打ち碎かれ、変異した物体をさす。このカバーには一体どのような意味があるのでだろうか。



ディーター・ロート『作品集』(特装版)、1969-76年
(上段左より) 第11巻、5巻、15巻、6巻、10巻、12巻
(中段左より) 第7巻、17巻、9巻
(下段左より) 第20巻、18巻、19巻

「作品集」に限らず、過去の作品に手を加えながら次々と別の作品を生み出す口一トにとって、このカバーも特装版用の單なる飾りやおまけではない。冊子を「オブジェ」に転換させる重要な装置として機能している。しかもこのカバーは確実にモノの性格を変えながらも、本の内容と切り離された装置ではなく本の中核を留めており、それぞれの本の内容が反映されたつくりとなつてゐるのである。例え



ジャン・クラランス・ランペール著
ヴィクトル・ヴァザルリ『コード』1967年
図版はケースを広げた状態。右側に冊子が収まり、左側は窓があり貫かれている。写真では箱の内側を表として版画を挿入しているが、反対側に向ければ、ケースを閉じた状態で上から版画を見ることがある。
版画、エンボス等8点収録。



ベルナール・エドシック著、ルース・フランケン
『楽譜V』1973年
左下、本の表紙にはレコードが挟み込まれている。上部にある受話器のオブジェは取り外し、入れ替えることが可能。

ば第10巻『デイリー・ミラー』は、一九六一年に制作された2センチメートル角の本にアレンジを加え、規定の判型に整えたものであるが、特装版の表紙には元になつた小さな本が収められている。カバーを伴うことで、より一層作品の意味内容が明解になっている。作家による『作品集』の再解釈がカバーに示されていると言つてもよい。このカバーは自分で楽しむだけでなく、場合によつては広げて版画として鑑賞し、中に収めたテープを聴くこともできる。様々な要素を含んだカバーで本を包むことこそ、ジャンルの境界なく活動したロートの真骨頂であり、そこに本に対する愛情を感じられる。

もう一つの例は一九四八年から八〇年にかけてフランスで発行された「ソレイユ・ノワール」のシリーズである。出版者フランソワ・ディ・ディオは文学と美術の融合を目指し、設立したソレイユ・ノワール社から70点に及ぶ魅力的な本を行した。一作品につき三つのバージョン（エディション）を持つ中で特筆されるのは、シリーズAと呼ばれるバージョンである。いずれも他に例をみない、趣向を凝らした造本となっている。

例えは『アントナン・アルトーの肖像』では、直立する橢円形の箱に本と四枚のプレートが収納されている。著者はオットー・ハーン、オブジェを制作したのはルーチョ・ファンタナで、プレートと箱の前面にはファンタナの作品に特徴的な穴がくり抜かれている。また『楽譜V』（ベルナール・エドシック著、ルース・フランケン作）で冊子を收めるのは二つの受話器が付属するオブジェの引き出しである。版画を伴つた『コード』（ジャン・クラランス・ランペール著、ヴィクトル・ヴァザルリ画）や『キヤラメル鳥』（ロベール・ルベル著、マックス・エルнст画）ではケースが単に本と版画を収納するだけなく、版画を飾るフレームとしても活用される。

「ソレイユ・ノワール」は「ブック・オブジェ」（本のオブジェ）として制作され、しばしばそのように評されているが、いざも冊子体を構成要素の一つとしている点において、ブック・オブジェというよりも美術家が手がけた豪華なケース入りの本と見なす方が適当ではないかと私は考えている。むしろ冊子という形態にこだわることなく、立体的に展開する『本』こそ、ブック・オブジェと言えるのではないか。

まどわしの空間 —遠近法をめぐる現代の15相

2003年11月18日(火)~2004年2月22日(日)
うらわ美術館ギャラリーA・B・C

遠近法をテーマに、強調や歪み、錯綜を示す作品やそれに関連しつつ様々なに展開する作品を現代の視点から紹介します。絵画、写真、立体、インスタレーションなど多様なジャンルから、国内外の14人の作家と1組のコラボレーションによって15の表現として構成します。

協力 富士ゼロックス株式会社 ART BY ZEROX
観覧料 一般630円(500円)、大高生420円(330円)、
中小生210円(160円) () 内は20名以上の団体料金

コレクションによるテーマ展Ⅶ 浦和アトリエ村3 赤羽夕景 —高田誠・石井桃子の家路より—

2003年11月8日(土)~2004年2月22日(日)
但しイベント開催のため12月13日(土)から22日(月)まで休室
うらわ美術館ギャラリーD

昭和初期、アトリエ村にたとえられた浦和の美術家とその様相を探る第3弾。ほぼ同時代に浦和に生まれ育った洋画家の高田誠と児童文学者の石井桃子に焦点を当て、高田の風景画と石井の回想記から構成します。

観覧料 無料

うらわ美術館

月曜日休館(月曜日が祝日の場合、その翌日)

午前10時~午後8時

〒330-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1

浦和センチュリーシティ3F

tel 048-827-3215 fax 048-834-4327

info@uam.urawa.saitama.jp

www.uam.urawa.saitama.jp

本にアレンジを加え、規定の判型に整えたものであるが、特装版の表紙には元になつた小さな本が収められている。カバーを伴うことで、より一層作品の意味内容が明解になっている。作家による『作品集』の再解釈がカバーに示されていると言つてもよい。このカバーは自分で楽しむだけでなく、場合によつては広げて版画として鑑賞し、中に収めたテープを聴くこともできる。様々な要素を含んだカバーで本を包むことこそ、ジャンルの境界なく活動したロートの真骨頂であり、そこに本に対する愛情を感じられる。

例えは『アントナン・アルトーの肖像』では、直立する橢円形の箱に本と四枚のプレートが収納されている。著者はオットー・ハーン、オブジェを制作したのはルーチョ・ファンタナで、プレートと箱の前面にはファンタナの作品に特徴的な穴がくり抜かれている。また『楽譜V』（ベルナール・エドシック著、ルース・フランケン作）で冊子を收めるのは二つの受

話器が付属するオブジェの引き出しである。版画を伴つた『コード』（ジャン・クラランス・ランペール著、ヴィクトル・ヴァザルリ画）や『キヤラメル鳥』（ロベール・ルベル著、マックス・エルнст画）ではケースが単に本と版画を収納するだけでなく、版画を飾るフレームとしても活用される。

「ソレイユ・ノワール」は「ブック・オブジェ」（本のオブジェ）として制作され、しばしばそのように評されているが、いざも冊子体を構成要素の一つとしている点において、ブック・オブジェというよりも美術家が手がけた豪華なケース入りの本と見なす方が適当ではないかと私は考えている。むしろ冊子という形態にこだわることなく、立体的に展開する『本』こそ、ブック・オブジェと言えるのではないか。

■アロフィール（よしもと・まみ）うらわ美術館学芸員。担当展覧会「見る・読む・触れるアーティスト・ブック 大竹伸朗とディーター・ロート」（2001年）、「アーティストの作った雑誌、そご詠み」（2001年）、「読む風景、眺める本」（2002年）。現在イギリス、バルティックで開催中のアーティスト・ブック展に参画。"Outside of a Dog: Paperbacks and Other Books by Artists" BALTIIC The Center for Contemporary Art, England 2003.9.27-2004.5.30

装丁違論

花ざかりの装丁論、造本論

このところ装幀や造本に関するBook on Bookがにぎやかだ。

先頃はパソコン関連誌「DTP WORLD」でも、別冊形式で全冊特集「BOOK DESIGN」がワークスコーポレーションから発行され、今後半年刊でレギュラー化するようだ。

少し前には大貫伸樹『装丁探索』(平凡社)が出版され、雑誌「ユリイカ」九月号でも「ブックデザイン批判」という特集号が組まれた。その前には九九年刊行の『装幀時代』(晶文社)に続く装幀論集第二作となる白田捷治『現代装幀』(美学出版)が刊行されている。十月に刊行される「装丁の仕事160人」(日本図書設計家協会・玄光社)や「デザインの現場」「みずゑ」(美術出版社)誌上での関係特集号などを加えていえば、毎月一点は出てくる感のある刊行ペースである。「なんでこんなに装幀、装丁どうるさいの?」状況だといえる。どこに理由があるのだろう。

その理由のひとつには、新刊点数の増大があるだろう。業界総売上は世紀末の九〇年代半ばから減少の一途をたどりだすのに、反比例して新刊点数だけは増え続けていく傾向にあり、出版元にとってどこまでが許容範囲なのかはいざ知らず、返品率は40%を超える数字をキープしたまま推移している。

レコード業界には「ジャケ買い」などと

いう言い方があったようだが、出版の世界でも、表紙デザインに魅かれてつい手を伸ばして買ってしまうという読者が存在するらしい。そういう読者に向けて、カバーデザインだけはやけにぎやかな書店の平台、面陳棚が増加中だ。要は「売ら

んかな」「売れてくれんかな」のデザイン

先行が反映しているからと言えるだろう。慎ましやかな自己主張で読者の注視と取捨選択を待つだけでは、購入という最終目的にまでつながらないという出版社サイドの判断が、「見て、見て。私を選んで!」と言わんばかりの、媚を売る厚化粧の本の量産化を促しているといえる。た

だにぎやかな装幀、造本論だが、「そういう」という用語をどう解釈して使用しているか……となると、どうもすつきりしない。用語にははやりすぎたりがあり、昨今見かける表記には「装幀」と「装丁」とが二分しているようだ。

表記と用語の意味内容について資料を博検して解説し、しかし自分ではどちらの用語も「複製印刷され不特定多数の人々の目に触れる機会のある文章では使うことはない」と思う」と書いた田中栄の「「そうい」用字用語考」(「ユリイカ」九月号)は、装幀家も含めて、出版の仕事に關わる人は読んでおくべき論考だろう。

今回の原稿依頼を受け、私も本棚の片隅から恩地孝四郎『本の美術』(「装本と釘・装本・造本・製本」をはじめとする関連文献、『出版事典』『図書学辞典』『日本書誌学用語辞典』などの辞典類を引つ張り出してメモしたりしていたが、この論考以上にはまとめようがない。

世間には「寝るときも化粧は落とさない」という、怖い女性が実際に存在するらしい。そういう読者に向けて、カバーデザインだけはやけにぎやかな書

身まで薄いと「悲惨」の一語に尽きる。

カバーを外すとどうなるか

と媚を売る本も、カバーデザインだけが先行して、肝心の内容が読むだけ時間の無駄だたり、こけおどしのタイトルで読者の関心は引いても、まあがき、あとがき、あるいは目次をながめるだけで元に戻してしまう本も結構多い。これら厚化粧の下がどうなっているか? 本を購入するに際して、カバーを外して、本表紙の姿まで確認して買う・買わないを決定する人はそれほど多くはないだろう。私もごく普通の読書人であつてみれば、最近めつきり読まなくなつたが、ファイクションを購入する時くらいに表紙カバーを外すことが多い。もっとも、学術書で装幀に

川口 正

「見て、見て。私を選んで!」

と媚を売る本も、カバーデザインだけが先行して、肝心の内容が読むだけ時間の無駄だたり、こけおどしのタイトルで読者の関心は引いても、まあがき、あとがき、あるいは目次をながめるだけで元に戻してしまう本も結構多い。これら厚化粧の下がどうなっているか? 本を購入

するに際して、カバーを外して、本表紙の姿まで確認して買う・買わないを決定する人はそれほど多くはないだろう。私もごく普通の読書人であつてみれば、最近めつきり読まなくなつたが、ファイクションを購入する時くらいに表紙カバーを外すことが多い。もっとも、学術書で装幀に

すことが多い。もうとも、学術書で装幀に

う手の込んだ仕掛けで、なでさすつてや

りたくなる表情を見せてくれることもあり、「直接眼に触れないこんなところにずっといる」と言わんばかりの、媚を売る厚化粧で化かされてしまった」と後悔に臍を

いた。

た函入本の場合は、さすがにこの手合いは少ない。稀には空押し、箔押しなどといふ手の込んだ仕掛けで、なでさすつてや

りたくなる表情を見せてくれることもあり、「直接眼に触れないこんなところにずっといる」と言わんばかりの、媚を売る厚化粧で化かされてしまつた」と後悔に臍を

いた。

と想っていることも多い。

製作原価とのからみで、めつきり減つた函入本の場合は、さすがにこの手合いは少ない。稀には空押し、箔押しなどといふ手の込んだ仕掛けで、なでさすつてや

りたくなる表情を見せてくれることもあり、「直接眼に触れないこんなところにずっといる」と言わんばかりの、媚を売る厚化粧で化かされてしまつた」と後悔に臍を

いた。

と想っていることも多い。

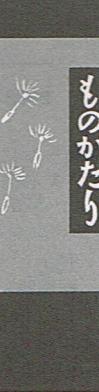
ゴシック体は見出し活字で多用されるが、本文活字をこれで組まれた本に当ると、本当に眼が疲れる。丸ゴシック体でカバータイトル文字を処理した本は「捨ててしまいたい」気になるが、「中身が必要だから」と泣く泣く購入した本もある。

版社やなあ」と、感激にむせぶことも……。かつては私家版、自費出版、社史、記念史の類に、錢に物を言わせた造りの本が多くてある。しかし「こんな文字使いの装丁をする装幀家は装幀家とは認めんぞ!」と考えていることも事実だ。

長体や斜体も同様で、単に「目立たせる」「目立ちたい」ための文字使いとしか思えない使用例が圧倒的ではないだろうか。

邪道だろう。

田村義也
の字
ものがたり



田村義也や平野甲賀の装幀で多用される「書き文字」には独特の味と力がある。

初号活字、新聞八号活字、写植五十六級以上の大きさの文字で表紙・カバーまわりを装丁・デザインしようとすれば、当然描き文字を使用することになる。活版であれば写植であれ、活字見本書体をそのまま書名や著者名に使つた装丁・デザインの本は「文字の力が弱い」とは、昔から理解されてきたようだ。端正な明朝体であつても、眼をこらしてよくみると「書き文字」が使われていることが多い。

「昨日の装丁家・デザイナーの中には、文字づかいに無頓着な人が増えているのか?」と思われるよう装丁作品には、書店の平台や棚で出くわすことが多いと感じるのは、私だけではないと思う。タイポグラフィーやエディトリアル(デザイン)にまで言及する力は私にはないが、プロデザイナーや、プロ装丁家らしくない組版設計や丁作品は御免こうむりたいものだ。市販誌でも、ページレイアウトのフォーマット設計がなされているのかどうか疑わしい組版にであつたりすると「がっくり」する。

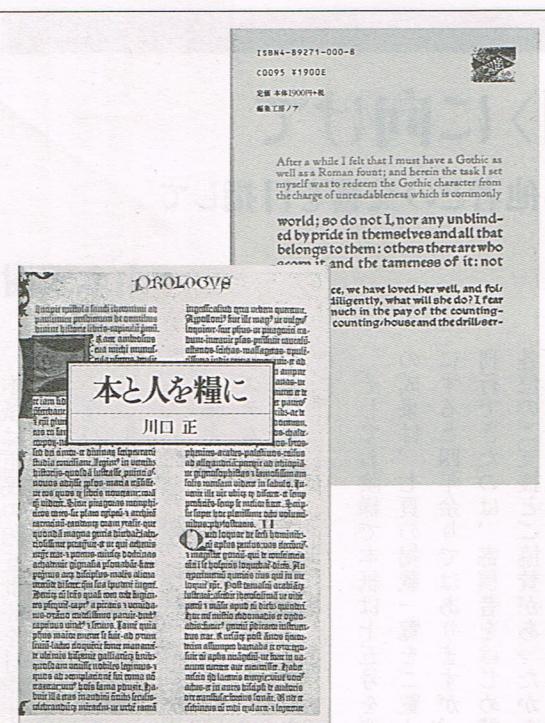


金をかける出版社は稀であり、飾り立てたカバーやそれまでにない意匠を競うのは「はい、いつちよあがり」という体の「安ければよからう」本が横行しているよう気がしてならない。

この場合は出版社や編集者のその本に入

れ込む気合が顕わになるのだ。色気づいた少女たちは、内面を磨くより化粧やようになる。化粧を落としたらまるで他人のような人がいるのと同様に、カバーを外すと、かかつたときの眼をひく表情から一転、みすぼらしさをさらけ出す本

の時代だが、書体でいえば「明朝体に止め可読性は無視できないから、本文書体に明朝体以外の書体を使う例は雑誌を除いて書籍にはあまりない。七〇年代後半以降だったろうか、「ノンノ」や「アンアン」



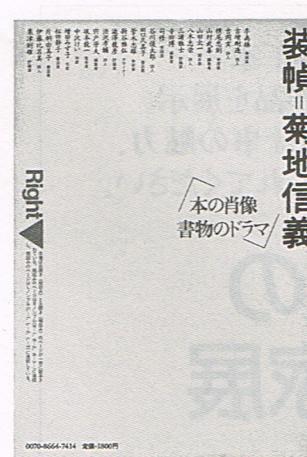
川口正「本と人を糧に」
編集工房ノア 2002年刊 装丁・市井仁

表紙に使用した図版はゲーテンベルグ印行の『四十二行聖書』第一頁「聖ヒエロニムスの書簡」、裏表紙には〈理想の書物〉を追い求め、私家版工房くルムスコット・プレスを設立したウイリアム・モリスの設計した三書体を引用。装丁者の意図がデザイナーに十分に伝わらず、書名・著者名の位置、図版の使い方などでトラブル。表紙印刷のやり直しなどで製作経費がかかった。ハードカバーでスピンドルがないなど、問題も残った。

いつ頃からか、本造りの黒衣ノア編集工房（稻川方人）が書いた「編集裏話本」が増えだした。一方で「装丁裏話本」も、劣らず多くなってきた。著名な装丁家なら、複数の著作を持つたりする。そうした中でも、菊地信義の語り本（稻川方人がインタビュー）である『装丁ノア菊地信義』（フィルムアート社、一九八六年刊）は印象に残っている。その大きな原因是「左右どちらからでも読める本」という造本にあった。自身の装丁観を披瀝しつつ、テキストの読み込み、組版設計、用紙選択、左右両開きで読

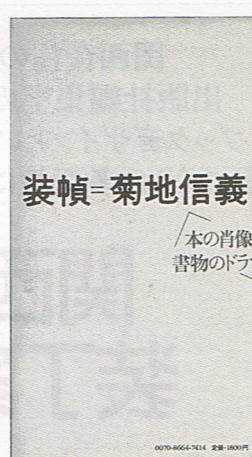
印象的な装帧論

自分の本は自分で装つてやるのが、結局は一番いい方法だとえるのではない



0070-8664-7414 定価:1800円

（士）日（民）日（SUNDAY）



0070-8664-7414 定価:1800円

（士）日（民）日（SUNDAY）

めの本にするための、紙の二枚重ね折りなど、実際にこの本が出来上がるまでを述べつつまとめられた本文は、本文組版までふくめ、一冊の本の生成過程を知るスリリングなものだった。一方で、装帧を託されて、その材料を求めて旅する過程を文学作品のようにまとめた司修の「気ままなる旅」（筑摩書房、一九八六年刊）のような形の装帧論も、類書がなく強く印象づけられた。

好きな装帧家や装本作品、自著の装丁

（自分の本は自分で装つてやるのが、結局は一番いい方法だとえるのではない）裏話など、触みたい点はほかにもあるが、紙数が尽きた。

なお、原稿表記上で、装帧と記したり装丁としたり不統一だが、これは「そうていの用語法が統一していないと同様に、私の中での言葉に対する「振れ」をそのまま表している。また、「いろんな」といえば「異論」と表記すべきだろうが、あえて「違論」とした。

本紙掲載一覧のご案内

■創刊号掲載内容 (99/12/01発行)

- ◆社会改造プログラムとしての「投げ銭」／松本功 ◆余りの方から割り算されて——『性現象論—差異とセクシュアリティの社会学』を読む／加藤正太郎 ◆ドラゴンアッシュは「親離れ」の90年代型モデルである／田中俊英 ◆ヴァジラヤナの封印について／森ひろし ◆『La Vue』への誘惑（創刊の言葉）／山本繁樹

■2号掲載内容 (00/06/01発行)

- ◆ジェンダー・立ちすくむ経験／落合祥堯 ◆フトボーラーの進歩についての試論／山口秀也 ◆商品の呪術的性格の脱魔術化に向けて／平野真 ◆ヘーゲル『精神現象学』は〈超・娯楽読み物〉である／佐野正晴

■3号掲載内容 (00/09/01発行)

- ◆ダンスに感応する関西の日々～「観る身体」になるために／小暮宣雄 ◆セクシュアリティにおける「語り口」の問題 あるいは「私の問題をわからせるには、どうしたらいいのでしょうか？」／栗田隆子 ◆ビデオ『罪なく罰せられて—婚外子の声—』を制作して／江上諭子 ◆殺佛／富哲世 ◆音触りのすすめ／小原まさる ◆風土と身体に刻まれた歴史感覚—琉球弧の思想的〈現在〉／大橋愛由等

■4号掲載内容 (00/12/01発行)

- ◆インタビュー「生命学者の森岡正博さんに聞いてみよう。—大切な「本人の意思」原則—臓器移植法「改正」に異議あり!」／森岡正博 ◆書物受難の時代／福嶋聰 ◆シドニーは燃えているか、あるいは日本〈的〉サッカーの行方／山口秀也

■5号掲載内容 (01/03/01発行)

- ◆詩をめぐることばの現在／高橋秀明 ◆紫の上のいのり／ゆふまどひ あかね ◆「魂脳論序説／中塚則男 ◆複製芸術論のアクチュアリティー／平野真 ◆日本一あぶない音楽—河内音頭断片／鶴飼雅則 ◆私はその存在を肯定したい。—立岩真也著『私の所有論』『弱くある自由へ』を読む／加藤正太郎

■6号掲載内容 (01/06/01発行)

- ◆鳳凰堂のペルシャ美と京都復興—「京都デザインリーグ」の試み／渡辺豊和 ◆わたしは、「懸命に」ゲイに「ならなければならない」／大北全俊 ◆「態度の変更」として—柄谷行人著『倫理21』を読む／村田豪 ◆「これが好きだということが好きだ／小杉なんぎ ◆わたしたちは忘却を達成した—大東亜戦争と許容された戦後／野原燐

■7号掲載内容 (01/09/01発行)

- ◆映画学事始め—映画研究者失格の記／上倉庸敬 ◆緑の国のインディアン／小原まさる ◆新宮市住宅地図調査日誌—新宮で読む中上健次／村田 豪 ◆本の取り寄せ奮闘記／山田利行 ◆倫理って何なんだ!—倫理の共有は可能か?／ひるます

■8号掲載内容 (01/12/01発行)

- ◆これからおもしろくなる／立岩真也 ◆将来の公正らしさを保つ」という「超」能力の要求—裁判官採用人事における思想差別／神坂直樹 ◆竹田エロス論とく他者=外部／神名龍子 ◆六条御息所の魂／ゆふまどひ あかね ◆正義って何なんだ〜!／ひるます ◆魂の経済学序説／中塚則男

■9号掲載内容 (02/03/01発行)

- ◆暴力と男性—バタラーたちとともに／中村正 ◆変革の起点としてのコミュニティ／榎本輝彦 ◆マスコミは生活に出会えるか／松本康治 ◆パフォーマンス・バブル／フルカワトシマサ ◆「〈歌集死明〉上梓のこと」富哲世*歌集「死明」は、窓月書房から3月に刊行。◆メディアに隠された場所で—ユーゴへの旅／元吉瑞枝

■10号掲載内容 (02/06/01発行)

- ◆出版物、大好き／ミルキィ・イソベ ◆「本をめぐるアート」をめぐる試み／吉本麻美 ◆偶像崇拜の記号論／岩田憲明 ◆Beとして存在した芸人マルセ太郎／梨花 ◆男が暴力をふるう本当の理由／沼崎一郎

■11号掲載内容 (02/09/01発行)

- ◆グローバリゼーションと身体のテクノロジー／美馬達哉 ◆ポストWTCの建築／米正太郎 ◆肉声の明滅／上山和樹 ◆技術革新と個人出版／8月サンタ ◆翻訳学の可能性／岩坂彰

■12号掲載内容 <特集:一読多読> (02/12/01発行)

- ◆武田百合子『ことばの食卓』／内浦亨 ◆往還の湖—橋本康介『祭りの笛』覚書断片／今野和代 ◆マカル・ジェーヴシキンという性格／中島洋治 ◆狂気なき狂氣の現代—バタイユ『至高性』／宮山昌治 ◆ありふれた平凡な自分とありふれた平凡なコトバ／安喜健人 ◆アンケート回答「一読多読」

■13号掲載内容 (03/04/01発行)

- ◆たちあがることば／寺田操 ◆贈ることの宇宙／小原まさる ◆美って何なんだ〜?／ひるます ◆アカデミズム再考—三十数年ぶりに大学生になって思い直すこと／元正章 ◆わかるということ—ある数学の体験／加藤正太郎

■14号掲載内容 <特集:映画多彩> (03/08/01発行)

- ◆交換する声—青原さとし『土德—焼跡地に生かされて』／今野和代 ◆『銀幕の湖国』番外編／吉田馨 ◆映画『夜と霧』の中で／康守雄 ◆映画から届いた「肉声」／橋本康介 ◆アンケート回答「映画多彩」

■15号掲載内容 <特集:装帧談義／造本の周辺> (03/12/01発行)

- ◆「装帧好き—天野忠さんの十三冊の本」／酒井純平 ◆手製本は周回遅れのトップランナー／藤井敬子 ◆オブジェとしての装帧／吉本麻美 ◆装丁違論／川口正 ◆『La Vue』の〈新創刊〉に向けて—自己の脱構築とさらなる他者との交響を目指して／山本繁樹

関西在住の装丁家と
出版社編集室の作品を展示。
ブックデザインという仕事の魅力、
本づくりの多面性にふれてください。

関西の 装丁家展

2003年12月1日(月)～6日(土)
午前10時～午後6時(最終日は午後4時まで)
入場無料

場所：大阪府立現代美術センター展示室B
大阪市中央区大手前3-1-43 TEL 540-0008
大阪府新別館北館地下1階 TEL 06-4790-8520
交通：地下鉄谷町線・中央線「谷町4丁目」駅下車、
1A出口方向へ徒歩3分
京阪「天満橋」駅下車、東出口から南へ徒歩12分
問い合わせ先：大阪府立現代美術センター

主催：大阪府立現代美術センター
大阪府立文化情報センター
(社)日本書籍出版協会大阪支部

■「火」になき灰
【訪問】イメージと記憶をめぐつて
【問】ジャック・デリダ著
定価1,400円+税 松籬社刊
【失語症を解く——言語聴覚士が語るこ
とばと脳の不思議】
【問】関啓子(神戸大学医学部教授)著
定価1,000円+税 人文書院刊

★今年の六月に、本の流通に携わる仕事からの方向転換を図った結果、むしろ直接
本に触れる機会が増えた。そこでは本の構成要素としての紙や糸、糊などの部材の
物理的構造にまで踏み入り本を観察する必要も生ずる。この本にまつわるマスから
ミクロへの視点の変化は思いのほか劇的だ。そんな個人的な事情も手伝って、ル
リコールを手掛ける藤井敬子さんの文章に興味を惹かれた。(山口秀也)

★浜沢純平さんの初稿を読みながら、著者と編集者の違いを取りまとめながらかつ味
わい深く感じた。また、編集者として著者に応接する態度や本造りへの拘りなど、
名編集者から学ぶべきことは多い。また詩人・天野さんの横顔を描いた本稿は、関
西の詩壇を語る上でも貴重な資料だと思う。それにしても、その天野さんから手造
りの限定部の本を贈られるというのは、編集者冥利に尽きるだらう。その貴重
な書影を掲載できた本紙もまた光榮である。

「La Vue」の〈新創刊〉に向けて —自己の脱構築とさらなる他者との交響を目指して

山本繁樹

本紙は市民の相互批評を目指す評論紙として、読者の方々の「投げ銭」及び「木戸銭＝年会費」というパトロンシップによる発行運営を志向＝試行してきました。

「投げ銭」というのは、読者が内容を読み終わつたあとで評価に応じて「後払い」していただくシステムです。そのことによって、在野の表現者や研究者を支援する評論紙の維持を目指したわけです。

そしてお陰様で本紙は十五号を迎えるました。その成果は、七頁の掲載一覧をご覧ください。年数になると四年余りではあります、ここまで継続刊行できたのは、寄稿者をはじめ読者および関係各位のご支援とご協賛があったからに他なりません。改めてこの紙面を借りてお礼申し上げます。

しかしながら、「投げ銭システム」による運営は軌道には乗りました。当方のアナウンスの不手際か、あるいは「投げ銭」それ自体のわりにくさからか、ほとんどの読者は本紙を「フリーペーパー」と做していたようでした。配布先(書店・文化センター等)での捌け具合や風評によれば、多くの常連読者がいるとは想定できたのですが、本紙を維持するための有料定期購読者の確保へとは繋がりませんでした。残念ながら本号を持ちまして、「投げ銭システム」の実践＝実験は中止といたします。

■「La Vue」告知
<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/lavue.html>

■「カルチャー・ムカヒ」
<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/review1.html>
(右記のウエブは検索で簡単にヒットしますので、未読の方はウェブでご覧いただけます。)

■「La Vue」は従来通りのスタイルで継続発行いたします。なお姉妹誌メールマガジン「カルチャーレビュー」は別途ご請求ください)。

「まるな工房・窓月書房」編集部までご連絡ください。追ってご案内申し上げます。

このようないくつかの趣旨での「新創刊」に向けて、会員(定期購読者)および投稿を募ります(投稿規定は別途ご請求ください)。

また「新創刊」の掲載案内を希望される方は、「まるな工房・窓月書房」編集部までご連絡ください。追ってご案内申し上げます。

るな工房/黒猫房/窓月書房 自費出版等のご案内

るな工房/黒猫房/窓月書房では、自費出版から商業出版まで、編集・製作・DTP・装幀・デザイン・トレースなど出版全般のお手伝いを申し受けます。お気軽にご相談ください。

■<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html>
■大阪市都島区友渕町1-6-5 408号 TEL 5334-0016
TEL 06-6924-5263 FAX 06-6924-5264

「哲学的腹ペコ塾」への誘惑

古典から現代思想まで、哲学関連のテキストを会食(輪読)する会です。これまでに、プラトン、アリストテレス、デカルト、ルソー、ヒューム、カント、マルクス、キルケゴー、ニーチェ、フロイト、フッサール、ペルグソン、ハイデッガー、ベンヤミン、サルトル、マルロー、ボンティ、フーコー、バタイユ、シモーヌ・ヴェイユ、T・クーン、デリダ、ラカン、スピヴァク、イリガライ、バトラー、アーレント、サイド、ネグリ、孟子、永井均、柄谷行人、などを読みました。

原則的には毎月第3日曜日の午後に、「るな工房/黒猫房/窓月書房」において行っています(但し、8月と12月はお休みです)。

ウェブにはレジュメの一部を掲載しております。

■<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/harapeko.html>